

《研究ノート》

モンゴル族の伝統的な色彩観念

西 林

〔要約〕モンゴル族は独特な色彩観念を持ち、そしてその色彩観念は生活環境、宗教、文化及び心理に密接な関係を持っている。モンゴル族の色彩観念、色彩の感覚は一般的な美感の中でももっとも大衆化された形式であり、素直にその民族の審美心理の側面を表しているのである。どの民族も自分の好きな色がある。モンゴル族も例外ではなく、その独特の色彩観を持っている。一般的に言えば、モンゴル族は基本的な色の白、青、黄色及び赤を好み、黒を忌む。この色彩観の形成はモンゴル族の生活環境、歴史、宗教、文化、心理などに密接な関係を持っている。

1. 遊牧生活と白の観念

周知のように、あらゆる民族の文化はそれぞれの客観的な地理的環境があり、また、この環境はそれぞれの民族の異なる文化の形式と文化の特性の形成に内面的な物質的な基礎を提供した。また、ある程度人々のすべての観念に影響を及ぼしている。もちろん審美観をも含んでいる。

モンゴル族は長期にわたって広びろとした大草原で生活している。空に浮んでいる白い雲、草原の白い羊の群れと白いポー（テント）、食べているチーズ、バター、乳豆腐、乳干しなどの白い乳製品、飲んで馬、牛、羊及び駱駝のミルク、特に好んでいる発酵された馬のミルクなど、これらのすべては日常生活のもっとも

主要な生活資料となって、自然に白を好むようになったわけである。

心理習慣から言えば、モンゴル族は九と白をあげめ尊び、九を吉とし、白を潔とする。白は純潔、善良、吉祥、及び親戚、友人に対する真実、率直のシンボルである。白い「ハダ」（絹布）は目上の人に面会する時、冠婚葬祭の時、客の出迎えの時によく用いる主要な物である。人はお互いに「ハダ」を贈りあうことによってお祭りの時は幸せで健康であるよう祝っており、結婚の時は新婚夫婦がお互いに愛し合い、共白髪まで添い遂げると言う意を表し、出迎いの時は客に対する親切と尊敬の意を表す。

ひいては名前と地名をつける時よく「ツァガン」（白）を用いる。例えば、ツァガンチク（白い花）、ツァガンバイル（白喜）、ツァガンチョロ（白い石）、ツァガンゴロ（河の名前）、ツァガンウスン（白い水）など。

文学作品の中で白は物事の性質を認める標識となっている。特に人物を評価する時、白に関係ある言葉を用いるわけである。例えば、「清らかな心」、雪のように白い（純真な）心（ツァガンセテゲ）、「心がやさしい」（ツァガンサナ）。

また、白はある物事の始まりの意を含んでいる。例えば：「お正月」はモンゴル語で「ツァガンサル」（白い月）。「ツァガン」は白の意で、「サル」は月の意である。それゆえに、「白年節」の言い方があるのである。マルコポールの記録によれば、韃靼人は西暦の二月を新年の始まり

とするということである。新年を迎える日、人は皆白い服を着る。かれらの考えでは、これは吉祥のシンボルである。この方法で一年中万事順調に運べ、健康であることを願う。貴族、上層階級では各自の家でお互いに白い色の送りを送り合う。そして、楽しげにお互いに祝福の言葉を交すのである。何しろ、歴史においても現実生活においても、白はモンゴル族の衣食住の各方面に及んでいる。共同文化の特徴上の心理感情を表している。つまり、白はモンゴル族の最も重んずる色彩なのである。

2. シャーマニズム影響下の青観念

モンゴル族が早期から信仰している原始宗教はシャーマニズムである。モンゴル諸部が統一される以前（16世紀から）、ラマ教が全盛時代に入ったが、シャーマニズムはモンゴル社会に普遍的に信仰されていた。それはモンゴル社会各分野にしみこんでおり、そして、深くモンゴル文化深層構造に沈澱していた。これは言うまでもなく、色彩観念の形成に影響したわけである。

青を重んずるのはシャーマニズムが天の神を拝むことによる。天は一番神聖で、すなわち、「永久の青い空」は永遠に変わることがなく、人類にすべての幸福を賜るのは善い神様で、大地はすべての生物を養う神様であり、モンゴル族牧民のすべての幸福は天地二神に決められると思われている。

青い空を頭上にし、緑の草原を踏んでいるモンゴル族人にとっては、青は理想を代表すると言う意を含んでいる。歴史の記載によれば、「韃靼民族の信仰と迷信の主宰者は天と同名、テンゲルである」。「テンゲル」はすなわち、「不滅な青い空」である。歴史の資料によれば、古代のモンゴル人は国家に「青いモンゴル国」と名前を付け、青い織物で国旗を作り、そして、

旗の下に進行している軍隊を「青旗軍」と言う。同様に皇帝の宮を「青宮」と言い、歴史のことを「青冊」、「青史演義」、「青史」などを言う。

モンゴル人は青を自然の中で永久で美しい色だと思っている。今もモンゴル族は依然として青い、長い服、バンド、青い模様の絨毯、青い縁のモンゴルポー（テント）が好きである。すなわち、モンゴル族は自分の民族が永久の空のように永遠に存在し、繁栄であることを希望しているわけである。

3. 仏教に影響された黄色観念

モンゴル族は黄色が好きであるが、主な色彩として重んずるのではない。多くは黄色を貴い、或は神聖なシンボルとしている。モンゴル人は黄色は黄金の色であり、また、黄金の色はすばらしい色であり、それはあらゆる基本的な色を代表できると思っている。人に権利を授ける書簡は黄い絹織物や黄い紙に書き、それで書簡の貴さを表すやり方をしたことがあった。同様にモンゴル族詩史で英雄が乗っている馬を黄驃馬と言う。英雄がかけている甲冑を金冑と言い、ひいては、身分が高い家族のことを金家族と言った。

私は内モンゴルのイジンホロ（伊金霍洛）旗に位置するジンギスハン陵に行ったことがあるが、陵の大部が黄色で、三つのモンゴルポー式の金色の琉璃瓦の建築物、丸いテントの頂が金色で、真中にある高さ五メートルのチンギス・ハーンの坐っている姿の像は全冑をかぶり、よろいをかけて、いかにも勇しく、威厳である。黄色は気高さと豊かさの意味を表す色と言えるであろうか。

しかし、黄色が一般的な色から宗教影響下の特殊な宗教感情的な意味を持っている色に変わったのは、ラマ教の伝道に関係がある。宗喀巴格魯派（黄教）の教義の影響で黄色に特別の敬意

を持つようになったのである（格魯派のラマは黄色の帽子をかぶるので黄教と言われたのである）。特にモンゴルが黄教に柔順された清の時代、政権は神権を強化し、また、神権は政権を神化した。それで黄色は自然に仏教の神聖なシンボルとして重んじられるようになったわけである。例えば、仏様の体は金色で、また、黄色の布に纏われ、生き仏様は黄色の袈裟をかけている。黄色に自然に神聖感と崇高感を生じた。今日、モンゴル族の黄色に対する理解ははるかに宗教的な色彩範囲を超えており、経済価値と表現形式の上から黄色を見直すようになった。しかし、わりに、集中的に住み、かつラマ教に影響される地域のモンゴル族の一般的な庶民は、依然として黄色を受け入れ難いのである。

4. 日常生活の中の赤色とわりに忌む黒い色

モンゴル族は従来赤い色が好きであった。古代のモンゴル人が生活の中で一番よく接触したのは火である。火の色は赤であり、獲物の血も赤である。火は寒さを防ぎ、食物を焼き、獣を追う払うことができる。火で自身の安全を守ることができる。獣の赤い血で飢えをしのぐこともできる。月日のたつうちにモンゴル人は赤の色から温かみと楽しみを感じた。赤に温かみと親しみを抱いたために、かなり長い時期にそれを民族のマークとして、帽子の房などの装飾品として、赤を使っていた。文献記載によれば、「元朝の皇后と妃及び大臣は皆グーグ（帽子の一種）をかぶり、長い服を着、あとは皮帽子をかぶる。グーグは円筒の形をして、高さは2尺ぐらいで、先は赤い布で覆われている」。

今でもモンゴル族は依然として赤い色が好きであり、濃い赤色の長い服を着、深紅の鞍を使っている。特に少女（若い娘）たちは赤い長服を着、赤い頭巾をかぶり、赤いハンカチを使うことが好きである。赤はモンゴル族の服飾の色彩

を充実させた。

ある意味から言えば、モンゴル族は疾の昔に広々として大草の鮮やかな色彩が彼らのために視覚的な情報を提供した重要性を発見した。彼らは遠い距離を隔てた人を連絡する時、鮮やかな服を着ると分かりやすいことをよく知っていた。暴風雨（雪）の中を鮮やかな色彩は命にかかわる情報となっている。

モンゴル族は比較的黒いを忌む。一般的に言えば、現実の生活の中で黒を好む民族は少ないが、モンゴル族は黒を忌む。モンゴル族の伝統的な審美意識で黒は醜悪に通ずる。歴史の記載によれば、モンゴル人は黒が敵、または、死者に関する事柄を表す悪い色だと思ふことである。元朝の時、治らない病気にかかる場所、テントの前に矛を立て、その上に黒い毛氈をつけ、そうすると、看病する以外の人には遠ざかる。文学作品と会話のなかで、人々はよく「ハルサナ」（汚い思想）、「ムサナ」（黒い心）、「ブゾイウグ」（乱暴、下品な話）、「ハルバザ」（闇市）などと言っている。つまり、黒で表された物事の性質は皆醜悪、誤謬、劣悪、不潔、危険である。

日常服飾から見れば、モンゴル族の人は昔黒の服は着なかった。今、審美観が変わったがゆえに、円熟、貴さ神秘、性的魅力を表す黒はかなりの人に受け入れられた。しかし、年寄りほとんど黒い服を着ない。これで分かるが、黒以外の色は皆モンゴル族がよく用いている色である。

総括すれば、モンゴル族の色彩観念は、その特別な面があるが、変わらないことはない。社会生活の多様性、及びモンゴル族生活方式の多様化が進むに従って、審美観も変わりつつ、色彩の審美も違ってくるかも知れない。

【参考文献】

《マルコ・ポーロ遊記》福建科学出版社、1981年

版

《蒙古族通史》上、中、下冊民族出版社、1991年

版

《中国少数民族》中国人民大学復印中心、1996年

全冊

(シー・リン、中国新疆ウイグル自治区新疆大
学助教授)